奥入瀬渓流の利活用検討 NEWS

第３号
（平成28年8月発行）
発行者：奥入瀬渓流利活用検討委員会事務局（十和田市・青森県・国土交通省）

このニュースレターは、「今後の奥入瀬渓流の利活用」について、地域の皆さまとのコミュニケーションの状況を広くお知らせするために発行しています。

第３回奥入瀬渓流の利活用に関する講演会・ワークショップ

講演会

近隣地域と連携して より大きな価値を発信

講演会の講師は、新潟県と群馬県をまたぐ「雪国観光圏」を創設された井口智裕さん（一般社団法人雪国観光圏代表理事）。

「個々の旅館や店舗だけで頑張っても、集客効果は限られる。観光客が求めるサービスを提供できるよう、地域全体で「雪国」という「価値」を共有して取り組むことが必要だと気づいた」と広域観光圏の意味や、観光客にとって魅力ある地域づくりのポイントについてお話いただきました。

（詳しくは３ページへ）

＊日　時：平成28年6月16日（木）14：00～17：00
＊会　場：奥入瀬渓流館（十和田市奥瀬）
＊講演のテーマ
　：地域連携による観光振興　～雪国観光圏の取組事例～
＊講　師：井口智裕氏（一般社団法人雪国観光圏代表理事）

＊講演の主な話題
・広域連携では、地域を超え、業種を超え、協働で取り組む素地をつくることが重要
・未だ気づいていない地域の価値を見出すことが大切
・地域全体でおもてなしの体制をつくることが重要

ワークショップ

地域が主体的に関わって「奥入瀬ビジョン」を進めよう！

ワークショップでは、広域連携にはどのような意味があるのか、また、今後はどのように関わっていけばよいのかについて話し合いました。

「奥入瀬ビジョン」については、地域が主体的に関わって進めることが必要であり、さらに、若者が参加しやすい場づくりや近隣地域の多様な主体の参加も必要との意見がありました。

（詳しくは２・３ページへ）

「奥入瀬渓流の利活用検討」とは

事業位置図

現在、国道103号奥入瀬（青橅山（あおぶなやま））バイパスの整備が進められています。

バイパスが整備されると、道路空間を柔軟に使うことが可能になり、観光振興ひいては地域づくりにも大きく影響します。そして、地域の皆さまの生活にも少なからず影響があると考えられます。

そこで、行政と地域の皆さまが一体となり、奥入瀬の交通規制、観光振興、地域づくりも含めて、「地域の将来のあり方」の検討が進められています。

平成28年２月から６月にかけて、奥入瀬渓流の利活用に関する講演会・ワークショップが３回開催されました。

今後も、「地域の将来あるべき姿」を実現するために、道路の利活用や観光振興にどのように取り組むのか等々、地域の方向性を示す「奥入瀬ビジョン」を策定するための検討が進められていきます。

第３回ワークショップで寄せられた ご意見の要旨

① 奥入瀬・十和田地域と近隣観光地との連携の可能性について

1-1 広域連携のあり方

魅力・資源を組み合わせたブランドの構築

- 魅力・資源を踏まえ、地域の中心軸を構築し、うまく結びつけて広域連携をすれば、ブランド力を発揮できる。各地域の視点が入り、取り組むアイデアも広がるだろう。
- 奥入瀬・十和田と、白神山地、八甲田は、魅力的な自然資源を有する点で共通するが、形成プロセスは異なる。観光客には、各地域の魅力とともに、地学的・歴史的資源の違いも伝えることが必要ではないか。
- 上十三・十和田湖広域定住自立圏構想や、かつての国境祭り（青森・秋田・岩手３県が十和田湖で開催）などの取り組みを、広域連携の素地として活用できるのではないか。

観光客ニーズに合わせた観光ルートの提案

- 各地域の魅力を整理し、各々の観光資源をつなぐストーリーを描く。観光客のニーズに合わせて観光ルートを提案すると魅力的なものになるだろう。
- 広域での観光ルートを設定し、合わせてバスなど公共交通も見直す。例えば、青森～十和田～秋田・盛岡ルートなどを提案できるとよい。

共通クーポン・パス等による観光客の利便性向上

- 十和田湖のボートや小坂町の人力車などを含め交通機関の共通クーポン・パスをつくると、観光客の利便性が向上するのではないか。

1-2 広域連携をする場合に考えられる課題

広域連携のメリットが不明確

- 広域連携のメリットを明確にした上で、地域住民・民間事業者に理解してもらう必要があると思う。

魅力・資源を踏まえた地域の中心軸が不明確

- 魅力・資源を踏まえて、地域の中心軸を設定する必要があるが、地域住民・民間事業者ほど、地域の魅力・資源に気づいていないので、彼らも含めて、中心軸の共通認識を持つべきではないか。
- 観光客にも中心軸を理解してもらうために、伝え方も工夫する必要があると思う。
- 台湾からの団体観光客、英語圏からの個人観光客が増えているが、観光形態によって、魅力の感じ方も違うだろう。観光客から見た魅力が何かを理解する必要があると思う。
- 地域の中心軸が決まると、「癒し」など、観光客にPRするキーワードも見えてくるだろう。すると、地域の生活スタイルも変わってくるのではないか。

連携する地域の範囲が不明確

- 地域的なつながりで言えば、秋田県は小坂町までに留まる。弘前には、城ヶ倉を挟んで十和田湖までは親近感を抱いてもらっていると感じる。
- 居住地域やガイドなど、立場の違いによって、「奥入瀬・十和田地域」の範囲が異なる。十和田市街地の住民は、十和田湖のみ。焼山・休屋・八甲田の住民は、十和田湖から奥入瀬にかけての範囲。ガイドは、十和田湖・奥入瀬から八甲田山までの範囲を思い描いているので、その違いを認識する必要があると思う。
- 各地域の自然・歴史などの特性を踏まえて、どのように連携するとよいのかを考えてはどうか。
- 十和田湖広域観光圏（平成21年当時、青森市、八戸市、十和田市、三沢市、七戸町、六戸町、東北町、おいらせ町）での連携は、あまり進展していない。

地域住民・民間事業者の参画不足

- 広域連携を進める人材育成、啓蒙活動が必要だと思うが、活動している方たちは、新たな取り組みをする余力がない。
- 地域住民は、あまり地域の取り組みに参加してこなかったが、最近は情報を得ることで、魅力・資源の価値を認識し始めたようだ。
- 民間事業者も、後継者不足などを理由に取り組みに消極的だったが、魅力・資源の価値を再認識し、地域でがんばる若者を応援しようという雰囲気がでてきた。
- かつての国境祭り（青森・秋田・岩手３県が十和田湖で開催）も官主導だった。地域住民・民間事業者が動かないと取り組みは継続しないだろう。このままではだめという危機感はあるので、まずは動いてみたい。

周辺地域・団体間の情報交換の場の不足

- 周辺地域・異業種間での情報交換の場がない。十和田市街地の住民もうまく巻き込めていない。
- 奥入瀬・十和田地域内でも、コケ・山歩き・ヒメマス・遊歩道などをテーマに取り組む団体はあるが、連携できていない。各々の活動・運営に手一杯かもしれないが、団体間で情報交換を行う場が必要だと思う。

道路の利活用方策の検討不足

- 広域連携を検討する上で、まずはバイパスや国道102号の利活用方策を固めることが重要ではないか。それが固まると、他地域との連携方法が見えてくるのではないか。

交通手段の不足

- 十和田湖畔での長期滞在やイベントを行う場合、交通手段の必要性を感じるが、その確保が難しい。

ユニバーサルデザインによるハードの整備不足

- 障がい者の方が安心してくつろげる環境整備が不十分である。広域連携を進めるためには、宿泊施設やトイレなど、ユニバーサルデザインによるハード整備が必要だと思う。

② 奥入瀬ビジョン策定の進め方について

2-1 検討すべきこと

交通規制方策の検討

- どこまで車を入れるか、時間帯やシーズンはどうするのかなど、交通規制の具体的な検討が必要だと思う。
- 観光バス・タクシー事業者、地域住民、観光客など、立場によって意見が異なるので、広く意見を聞き、検討メンバーや議題を決める必要があると思う。

第３回講演会　地域連携による観光振興　～雪国観光圏の取り組み事例～

一般社団法人雪国観光圏　井口智裕氏

一人では何も始まらないという想いから、広域連携の取り組みがスタート！

「北陸新幹線の金沢乗り入れ」をきっかけに、エリア全体で魅力を創出していかないと地域間競争には勝てないという危機意識が生まれ、広域連携の取り組みが始まりました。

それまでも、旅館の経営者として頑張ってきましたが、「一つの旅館だけでは自ずと限界がある」ことに気づき、地域の旅館だけでなく、飲食業・物販業・農業などの異業種との連携を通じて、「地域をブランディングしていくことが重要」だということを強く感じました。

こうして、周辺地域と『雪国観光圏』として広域的に連携することで、同じ想いをもった者同士が出会い、力を合わせて取り組むことができました。これは、広域連携の大きなメリットでしょう。

未だ気づいていない価値を見出すことが大切

雪国観光圏のブランディングと広域連携に際してまず行ったことは、地域ブランドの中心軸となる価値は何かという議論でした。

そして、地域の根底にある歴史や文化を踏まえることで「雪とともに暮らし、知恵を育みながら生活してきたことこそが価値である」という答えが導き出されたのです。

それまでは、大きな制約条件と思っていた雪国の特徴が、突如としてブランドに昇華した訳です。

奥入瀬渓流の魅力は自然ですが、その先には「癒し」があると思います。さらに、こうした魅力と地域文化を結び付けたブランディングが重要でしょう。

奥入瀬渓流で観光客をもてなすための体制づくりへ

雪国観光圏では、「100年後も雪国であるために」というビジョンをつくっています。ビジョンを定義することで、地域の理念を地域や若い世代と共有することができ、啓蒙活動や人材育成につながっています。

観光客に対しては、地域独自の価値と親和性の高い「コアなファン」像を想定した上で、マーケティングを行っています。また、様々なテーマを設定して、官民参加のワーキングも設置しています。

奥入瀬・十和田地域も、「観光客のニーズを満たすサービスを提供し、ファンになってもらうために、地域全体でおもてなしの体制をつくっていく」ことが重要でしょう。

2-2 今後のかかわり方・望ましい検討体制

広域的な検討体制の構築

- 今後の検討体制に、十和田市街地や市外の人にも入ってもらい、県民全体で共通認識が持てるとよいのではないか。
- 小坂・盛岡・秋田などにも、地域をよくしたいという思いのある人がいるので、周辺地域とも連携するべきだと思う。

多様な立場の人たちの参画

- 地域住民や様々な業種の民間事業者など、多様な立場の人たちに参加してもらうべきだと思う。

地域おこし協力隊員の活躍に期待

- 地域おこし協力隊の隊員の方には、行政と地域住民のパイプ役を担ってもらえるとよいのではないか。

若者が参加しやすい場の提供

- 若者が参加しやすい場を提供し、得意分野・取り組みたいこと、できることなど、やわらかい議論の場があるとよい。

活動組織の設置

- 地域住民・民間事業者が連携しながら、議論した取り組みを実行に移す活動組織もあるとよいのではないか。

2-3 まず始めるべきこと

魅力・資源の共有・議論

- ３回のワークショップで、地域の魅力・資源は明らかになってきたので、これらを共有し、何を地域の中心軸にすべきかを議論することが必要だと思う。
- ワークショップの議論を活発に行うため、他の活動団体にも声をかける。参加主体が増えることで、活動にも広がりが生まれると思う。講演会を通して、そのことに気づくことができてよかった。

民間事業者同士のコミュニケーション促進

- 民間事業者間でコミュニケーションをはかり、各々の取り組みを整理して、市民にも伝えられるとよいのではないか。

若者・意欲的な人がつながり挑戦する場の提供

- やる気のある人が、実験でもよいので、国道102号沿いの道路空間の利活用方策を検討し、取り組める機会があるとよい。成果を急がず、課題を改善しながら続けられるよう、周囲も応援できるとよいのではないか。
- 地域にやる気のある若者がいて、よく勉強しているので、彼らがつながれるしくみ・場があるとよいと思う。

広域的なイベントの開催

- コケをテーマに、県を越えて広域連携をしている団体もあるので、一緒に地域全体のあり方を議論できるイベントがあるとよいのではないか。

③ その他

魅力・価値を伝えるガイドの育成・確保

- ネイチャーガイドから地域の魅力・価値を聞き、地域の印象が変わったという声を聞く。プロのガイドの存在は大きいが不足しており、育成・確保するしくみが必要だと思う。

エコロードフェスタの情報発信方法の検討

- エコロードフェスタで使う「マイカー規制」という言葉が、不便という印象を与えるので、趣旨が伝わる言葉に変えたい。
- エコロードフェスタ期間中は、奥入瀬をゆっくり楽しみながら歩けることや、シャトルバスが頻繁に運行されていることをうまく伝え、フィールドミュージアムを実現するという観点から、情報発信できるとよいのではないか。
- エコロードフェスタ期間中に訪れる外国人観光客のために、外国語案内などをもっと充実させてはどうか。

3回の講演会・ワークショップのふりかえり

第1回

講演会

バイパスが整備されることで起こる変化、観光分野・生活分野の期待・課題

講　師：九戸眞樹氏
元青森県観光連盟専務理事

ワークショップ

奥入瀬渓流・十和田湖地域の課題と バイパス完成後への期待

第1回講演会では、「バイパス整備を観光振興にどのようにつなげるかを考えましょう」と九戸氏からの投げかけがあり、ワークショップでは、バイパス整備後の変化や、観光分野・生活分野の期待・課題について話し合いました。

国道102号の渋滞緩和や環境の保全、安全性の向上への期待の声もある一方で、交通規制による観光客や地域住民の移動への影響を心配する意見もありました。

第2回

講演会

地方創生時代の観光戦略の方向性を考える
～地域ブランドづくりを目指した観光振興について～

講　師：山下真輝氏
JTBグループ本社国内事業本部　観光戦略チーム　観光立国推進担当マネージャー

ワークショップ

奥入瀬・十和田地域の魅力・資源、地域を どのような人にどのように楽しんでもらいたいか

第2回講演会では、「観光客目線で、地域の魅力や資源を見直し、観光振興の方向性を考えましょう」と山下氏からの投げかけがあり、ワークショップでは、地域の魅力や資源を、どのような人にどのように楽しんでもらいたいかを話し合いました。

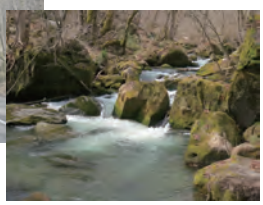
まず、自然・地質・景観・アクティビティなど地域の魅力や、国立公園特別保護地区内にある道路自体も観光資源であることなどを再確認しました。さらに、広域で観光ルートを設定し、観光客にゆっくり滞在してもらいたいという意見もありました。

第3回

講演会

地域連携による観光振興
～雪国観光圏の取組事例～

講　師：井口智裕氏
一般社団法人雪国観光圏代表理事



ワークショップ

近隣観光地との広域連携の可能性、奥入瀬ビジョン策定の進め方

第3回講演会では、「広域連携しながら、地域全体で観光客におもてなしをする体制をつくっていきましょう」と井口氏からの投げかけがあり、ワークショップでは、近隣観光地との広域連携の可能性や、その後の「奥入瀬ビジョン」策定の進め方について話し合いました。

近隣観光地と連携をしつつ、地元が主体となり、「奥入瀬ビジョン」の策定を進めるしくみが必要であることや、他市町村や異業種など、様々な立場の方の参加や、若い方が参加しやすい場も必要という意見がありました。

今後の進め方 ～奥入瀬渓流の利活用検討～

「地域の将来あるべき姿」を実現するために、道路の利活用や観光振興にどのように取り組むのか等の方向性を示す「奥入瀬ビジョン」を、平成29年度末を目途に策定する予定です。

奥入瀬渓流利活用検討委員会事務局では、地域の皆さまと密に対話をしながら、よりよい「奥入瀬ビジョン」を策定したいと考えています。

なお、今後もワークショップなどを開催し、引き続き、地域の皆さまと検討を進めていく予定です。

よりよい「奥入瀬ビジョン」の策定に向け、今後ともよろしくお願いいたします。

お問い合わせ先
奥入瀬渓流利活用検討委員会事務局（十和田市観光推進課）
〒034-8615　十和田市西十二番町 6-1　TEL：0176-51-6772